# 吹屋・旧片山家住宅の調査

**はじめに**　平成15年度、建造物研究室では岡山県成羽町より「町指定文化財旧片山家住宅調査」を受託し、調査研究をおこなった。片山家は重要伝統的建造物群保存地区に選定されている成羽町吹屋に位置し、18世紀後期より約200年間、弁柄生産業を営んできた豪商である。

吹屋弁柄は、吉備高原の本山銅山より産出される緑礬を原料とする。18世紀半ばから弁柄生産が始まり、山内に多くの工場が建設された。明治に入り近代化が進み生産量は更に飛躍し、明治末にはピークを迎える。その後昭和に入ると、他の安価な製品により吹屋弁柄は衰退し、現在は全く生産をおこなっていない。

**旧片山家住宅の敷地**　旧片山家住宅は、商店や旅館などが建ち並ぶ吹屋中心地の中町西部に位置し、敷地面積は約3,500㎡である。地区内を東西に通る道路に面し、向かいには当家の分家が３軒並んで建つ。これら分家の建物と旧片山家住宅の建物が、吹屋地区の中町西部一郭の町並を形成している。

片山家では、山間部に建てられた弁柄工場から運ばれた弁柄を精製調合し、梱包発送までの一連の作業をおこなっていた。そのため敷地内には、家人が生活し、店として機能した主屋の他に、弁柄の作業をおこなう作業場、使用人の生活空間、弁柄や木材、食料などを保管する空間など、用途に合わせて数多くの附属屋が建てられている。

片山家では合計７枚の家相図を所蔵している。そのうち最も古い文政13年の家相図を見ると、敷地形状は現状と大きく異なり、面積も約１/６程度である。その後、安政２年の家相図では、南に大きく面積を広げ、弁柄の主たる作業をおこなった弁柄倉庫とたきもの小屋が建てられており、この頃にほぼ現在と変わらない状態に整備されている。さらに明治に入り、敷地を増やし作業場と収納場所となる建物を建てている。もっとも建物数が多いのはこの時である（図69）。この変移は、吹屋弁柄の繁栄過程と重なり、吹屋が弁柄で発展していく歴史を物語る。

現在も敷地内の施設は保存されており、吹屋の歴史を持った弁柄豪商を代表する屋敷構えとして、敷地全体にその価値を認めることができる。

**主屋・附属屋**　主屋は、18世紀後半に主体部が建立され、文政、安政と増築を重ね、近世末頃にほぼ現状の姿となる。近世末期の吹屋の大規模商家建築を代表する事例である。明治初期に座敷の増改築、後期に表構えの更新などがなされ、近代の要素を併せ持ち、吹屋弁柄最盛期の明治期の様相も良く伝えている。

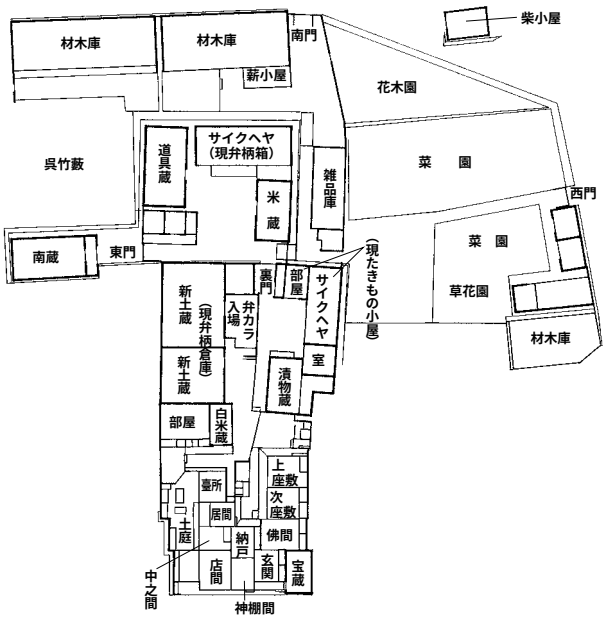

図69　明治31年家相図

数多くの附属屋のうち、弁柄倉庫、たきもの小屋の２棟は、弁柄に関わる作業をおこなう重要な建築である。いずれも安政２年の家相図に初めて描かれ、この頃に現在まで続く弁柄作業場が整備されている。片山家の附属屋の内部には、作業に必要な道具や弁柄などが残されており、各建物内部での作業状況を復原することができる。

また、主屋、付属屋の変移の過程が家相図や棟札より正確に押さえられている点からも、当住宅が資料的価値の高い貴重な遺構であると認められる。

当住宅の表構えを形成するのは、道路に面して建つ主屋と宝蔵の２棟の建物である。親子格子の出格子、格子框に取りつけられた鉄製の飾り金具、漆喰塗の壁及び海鼠壁などを特徴とする。吹屋地区では、格子や海鼠壁に様々なバリエーションが見られるが、当住宅はその中でも特徴的で、吹屋の町並景観にも欠かせない建築である。

**文化財としての価値**　旧片山家住宅は歴史性、建造物としての価値、町並の形成、景観などいずれの点に関しても、当地区において貴重な遺構である。将来的にも吹屋を代表する文化遺産として重要な役割を負うべき建築である。吹屋では既に、弁柄工場や町家などの施設が一般公開されているが、工場から運ばれた弁柄が発送されるまでの状況と、吹屋を支え続けた弁柄豪商がどのような生活を送っていたかを伝える施設はなく、今後旧片山家住宅が公開へ向け適切な整備を施され、吹屋発展の歴史を伝える重要な建築となることが期待される。

（大林　潤）